

[解説資料]

酒田市文化資料館光丘文庫第 6 回企画展示

こうきゅうぶんこ
光丘文庫100 年記念展

開催期間 令和 7 年 4 月 19 日（土）～8 月 24 日（日）



酒田市指定有形文化財（建造物）

きゅうこうきゅうぶんこほんかん
旧光丘文庫本館

大正 14（1925）年竣工。

所在地は酒田市の西、
日和山の下日枝神社境内です。

はじめに

大正 14（1925）年に財団法人光丘文庫が開館してから、今年で 100 年を迎えました。

光丘文庫の名称の由来である酒田の豪商・本間家三代目当主の光丘（みつおか享保 17/1733～享和 1/1801）は、公共事業や神社仏閣への寄進など、酒田に数々の功績を残した人物です。光丘が志した事業の中には、街道の難所「五丁野」に旅人を助ける寺院を設置し、そこを修学のための文庫を兼ねた場とするというものがありました。しかし、当時は幕府が寺院建立を禁止していたことから、ついに実現することはありませんでした。

時を経て大正 13（1924）年、本間光丘翁ほんまみつおか頌徳会は光丘の数々の功績を称え、「光丘神社」を創立しました。本間家八代目当主光弥みつやはその返礼として、光丘の奨学の遺志を受け継ぎ、文庫の建設と維持資金 10 万円と、先祖伝来の蔵書約 2 万冊を頌徳会へ寄贈しました。これを契機に頌徳会が「財団法人光丘文庫」を立ち上げ、大正 14 年に光丘文庫が開館しました。以来、有志による寄贈図書なども加わり、一般の書籍や郷土資料、貴重な古典籍など、広範な分野の資料を所蔵する図書館として、市民や全国の研究者に利用されてきました。

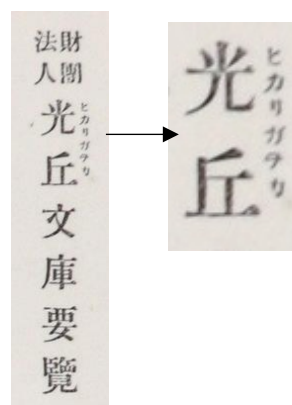
現在は光丘文庫の事業は酒田市に引き継がれ、書籍や資料は当館の所蔵となっています。

光丘文庫の歴史や設立期の資料、貴重な蔵書などをご紹介します。

※「光丘文庫」の読み方について

大正時代に設立した「財団法人光丘文庫」は「ひかりがおかぶんこ」という読み方が正式なものでした。右の画像は開館翌年の大正 15 (1926) 年に発行された『財団法人^{ひかりがおか}光丘文庫要覧』の題名部分です。ただし、大正 14 年 12 月 15 日付の『酒田新聞』では、光丘文庫の開館を知らせる記事で「こうきゅうぶんこ」と読み仮名をふっています。また、開館十周年を祝う電報には「コウキウブンコ」宛てに送られているものがあります。

昭和 33 (1958) 年に酒田市の運営となってからは「酒田市立光丘図書館(こうきゅうとしょかん)」「酒田市立光丘文庫(こうきゅうぶんこ)」と移り変わっています。



『財団法人光丘文庫要覧』
(大正 15 年) より

光丘文庫の名前の由来 ^{ほんまみつおか} 酒田の豪商・本間光丘

本間光丘（享保 17/1732～享和 1/1801）は、酒田の大地主本間家の第三代当主であり、本間家中興の祖といわれています。米取引を中心とした商売のほか、酒田の商人や米沢・松山・新庄など多くの藩を相手に金融業を営みながら土地を集積し、強大な財を築きました。

公益家としても名を残しており、光ヶ丘の砂防林植林や、神社仏閣の造営など、数多くの功績を残しています。酒田の山王祭が京都の祇園祭に倣った盛大な祭となったのも、光丘の力によるものと考えられています。また、光丘は商人として活躍しただけではなく、武士の身分を得て庄内藩に仕えていました。

本間光丘が取り組んだ、庄内藩財政の立て直し

明和 4 (1767) 年、光丘は庄内藩の「御家中勝手向取計」に任命され、藩財政の立て直しに取り組みました。その方法は家臣を苦しめていた多大な借金を肩代わりし、低利の年賦償還で返済させるというものであり、鶴岡の小姓町に置いた貸金役所（本間役所）で金融事務を行いました。

その当時光丘が使用した「御貸金方御用筆筒」の扉の裏には、「明和亥四年」「本間久二二郎（久四郎）光丘」などの墨書きがあります。



御貸金方御用筆筒

本間光丘と砂防林事業

本間光丘は宝暦 8（1758）年、酒田西浜造林の経営に着手しました。藩に申請して下の山王社（日枝神社）境内を起点に南は最上川岸から北は長坂までの地をあずかり、ここに植林を行うことで酒田町民を長年苦しめた風砂・火災に対する根本策としようと考えました。佐藤藤蔵（とうぞう）ら植林の先人たちの知恵に学び、失敗を乗り越えながらもさまざまな努力をし、砂丘を一大松林へと変えました。

現在、光丘の植林地は「光ヶ丘」という地名になっています。これは大正 8（1919）年にその功績を讃え「長坂」から改称したものです。



松林銘碑

光丘の偉業を後世に伝えるため、没後 15 年の文化 13（1816）年に、酒田町の有志が建立しました。石碑の四面にわたって光丘の功績を記しています。

下日枝神社境内西側の丘にあります。

本間光丘が目指した修学の間

西浜造林着手と同年の宝暦 8（1758）年、光丘は酒田の街道の難所「五丁野（五丁野谷地）」に旅人を助ける「接待寺」を設置することを、酒田町奉行所を通じて幕府に願い出ました。当時の五丁野谷地は一面の葭原であり、日中でも盗賊に襲われる危険があり、冬には吹雪で遭難するなど、旅人にとって非常に困難な場所でした。

光丘の目指した接待寺とは、旅人をもてなす宿泊施設であるだけでなく、博識の僧を招き、和漢の図書を取りそろえた経蔵も整備し、学びたくても資力に乏しく難しい人が利用できる、修学の場でした。現在でいう図書館に近い役割の施設とも考えられます。

しかし、当時幕府は新たに寺院を建立することを禁じており、光丘が生涯にわたって願い出たこの事業は、ついに実現することはありませんでした。



「庄内絵図」（天保期）より 「五丁野谷地」の場所

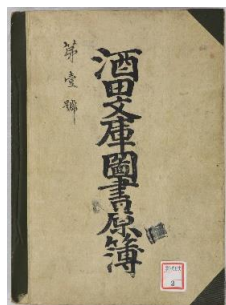
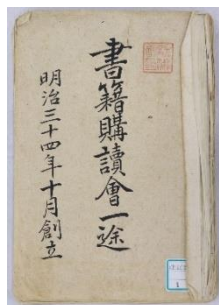
酒田の図書館の始まり

記録に残る酒田の図書館の始まりは、明治 34（1901）年に発足した「酒田書籍講読会」です。会の記録である『書籍購読会一途』によると当初の会員は 12 名で、校長や教職を務めた人たちが名を連ねています。事務所は琢成尋常高等小学校に置きました。会の目的は「本会はなるべく新版の書籍を購読し世の流潮におくれざらんことを目的とす」としており、当時最新の出版物を読むことを目的にしていたことがわかります。

明治 37（1904）年 4 月、講読会は名前を「酒田文庫」と改め、飽海郡会議事堂附属の建物を借り閲覧所としました。明治 42（1908）年 12 月に「私立酒田図書館」と改称しました。

私立酒田図書館はその後、大正 3（1914）年に酒田電気作業所跡に移転し、次いで大正 10（1921）年に海晏寺境内の瑞仙寺に移転しました。そして大正 14（1925）年 3 月 31 日、財団法人光丘文庫へ蔵書を引き継ぎ解散しました。

蔵書数の変遷をみると、酒田書籍講読会の蔵書は 200 冊ほどでしたが、明治 39（1906）年末の酒田文庫の蔵書数は 1000 冊以上となり、大正 4（1915）年頃の私立酒田図書館の蔵書数は 5,000 冊を超えるものとなっています。



左：「書籍購読会一途」（明治 34 年 10 月）

酒田書籍購読会の会則、本の貸出表等をまとめた資料です。

右：「酒田文庫図書原簿 第一号」

私立酒田図書館に改称後も使用された原簿であり、大正 3（1914）年までの蔵書を記載しています。

財団法人光丘文庫の開館

本間光丘頌徳会の結成

大正 7（1918）年、数々の公益事業を行った本間光丘の事績に対し、「正五位^{しょうごい}」が贈位されました。翌年、酒田町会は本間光丘の偉業を記念し、酒田市街北郊の長坂一帯を「光ヶ丘^{ひかりがおか}」と改称しました。

大正 10（1921）年、光丘の功績を顕彰しようとする有志たちは「郷社光丘神社^{ひかりがおか}」を創建することを目的に「贈正五位本間四郎三郎光丘翁頌徳会」を設立しました。翌年に内務省から神社創立の許可を得て神社の建設が始まり、大正 13（1924）年に鎮座祭が行われています。



郷社光丘神社（大正時代）

財団法人光丘文庫の設立

大正 12 (1923) 年 6 月 1 日、本間家 8 代目当主^{みつや}光弥は、光丘神社創立の返礼として頌徳会へ図書館建設ならびに維持費 10 万円と、先祖伝来の蔵書 2 万冊を寄附しました。本間光丘の奨学の遺志を受け継ぎ、頌徳会へ文庫の設立を託したのです。このことを受け、頌徳会は「財団法人^{ひかりがおか}光丘文庫」を組織し、文庫（図書館）開館に向けて動き出すこととなりました。

文庫の建設場所は^{ひよりやま}日和山、^{ひえじんじや}県社日枝神社境内東南の景勝地を選び、建物設計は内務省神社局建築課長の^{すなみたちし}角南隆、工事の請負人は東京の^{もりやまぜんべい}森山善平が担当しました。

大正 13 (1924) 年 1 月 26 日に起工式が行われ、工事が進められました。

光丘文庫の開館

大正 14 (1925) 年 12 月 12 日、2 階建ての本館と、3 階建ての書庫からなる図書館「財団法人光丘文庫」が開館しました。

開館記念式典には関係者が多数出席しています。招待人名簿を見ると、設計者の角南隆は残念ながら欠席していますが、森山式鉄筋コンクリートブロックの施工者森山善平が出席しています。

規則等も取り決められ、図書館としての運営が始まりました。

所蔵資料には有志による寄贈図書も加わり、広範な分野の資料を所蔵する図書館として、また学生の勉強の場所として、市民や全国の研究者に利用されていくことになります。



光丘文庫棟札（表面、裏面）



上棟式（大正 14 年 9 月 4 日）

大正 13 (1924) 年 1 月 26 日に起工、同年 12 月 6 日に地鎮祭が行われ、翌年 9 月 4 日に上棟式が行われました。地鎮祭よりも先に起工式が行われたのは、東宮殿下のご成婚当日に合わせて起工式を挙行了したことによります。

棟札の表面には関係者らの名前があり、裏面には工事にかかった賃金や材料費などが記録されています。

光丘文庫の建築

光丘文庫の設計を担当したのは、内務省神社局建築課長の角南隆、施工は東京の施工会社の森山善平です。森山善平が考案した「森山式鉄筋コンクリートブロック造」で現存する建物は光丘文庫が唯一のものとなっています。大火耐震性と書籍の保存性に優れた建物として仕上げられました。また、貴賓室は高島呉服店の装飾部門が担当しています。

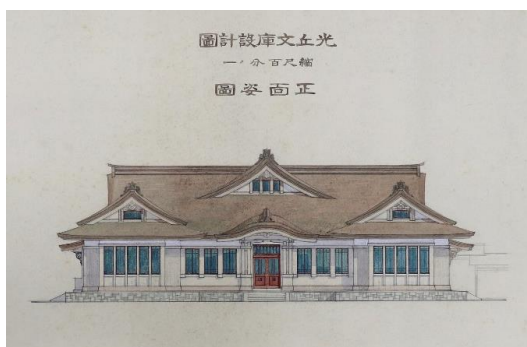
本館は銅板ぶき2階建の社殿造りで、鳥が翼を広げたような外観は、周囲の山王の森や日枝神社の社殿のある風景に調和しています。



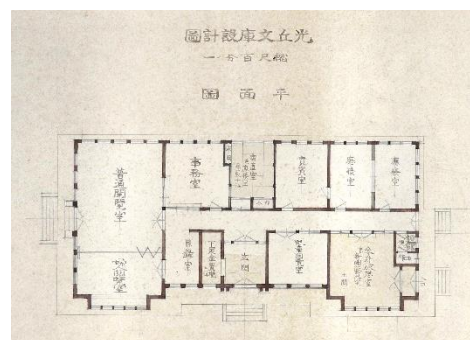
森山式鉄筋コンクリートブロック
製造作業のようす

当初の建築設計図

現在の建物とデザインが異なり、長方形の建物が考案されていました。



光丘文庫設計図（正面姿図）



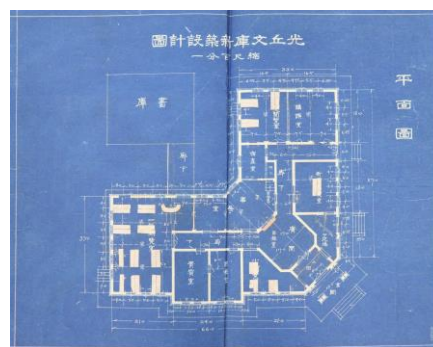
光丘文庫設計図（平面図）

実際の工事の際の設計図

くの字型の建物にデザインが変更されたことがわかります。



光丘文庫新築設計図（北面姿図）



光丘文庫新築設計図（平面図）

図書館報「光丘」

図書館の蔵書紹介や活動などのPRのために、昭和40（1965）年6月1日から、図書館報「光丘」が発行されました。「光丘」の読みは当初は「ひかりがおか」でしたが、昭和42（1967）年6月1日号から「こうきゅう」と改称しています。

1ページめには郷土ゆかりの人物や、郷土史家、教員など、記念号には酒田市長らが文章を寄せています。テーマは多岐にわたり、光丘文庫との思い出や、各専門分野のお話など、読みごたえがあります。



館報「光丘」第一号 表紙
(酒田市長 小山孫次郎「読書の思い出」
昭和40（1965）年6月1日発行)

酒田市指定文化財への指定

光丘文庫の建物と付属家具・資料一式は、平成8（1996）年3月に酒田市指定有形文化財に指定されました。平成6（1994）年に行われた調査の報告書では、光丘文庫建物の文化財的な評価として、以下の4点を挙げています。

- ①建物全体が立地条件を巧みに生かしつつ、近代的な図書館としての機能を十分に満たしているだけでなく、外観の意匠に和風の神社建築風の要素を加えた独自の意匠で建てられ、当時の「新和風」というべき様式をよく伝えていること。
- ②「森山式鉄筋コンクリートブロック造」という、大正から昭和にかけての時期に近代建築技術が普及していく過程で開発された非常に特色ある構造技術で建てられており、しかも今のところ確認されたものではこの技術で建てられた唯一の遺構であること。
- ③建てられてから70年（当時）が経ち一部損傷が見られるものの、主屋部分を中心に建物の状態が非常に良く、酒田職人を中心とする施工ないし仕事の質が良いということがわかること。
- ④建築当時の棟札や、写真・図面・各種記録などの関連資料がよく残っていること。また、内部で用いられた家具が良好な状態で保存されていること。



旧光丘文庫 扁額（佐藤鐵太郎書）



旧光丘文庫 鬼瓦

現在までの光丘文庫

昭和 25（1950）年に図書館法が施行され、酒田市にも市立の図書館が設置されることになり、同年 4 月に財団法人光丘文庫の建物及び蔵書の一部を借りて「酒田市立図書館」が設置されました。

昭和 33（1958）年 4 月、財団法人光丘文庫は建物及び蔵書等を酒田市に寄附して解散しました。酒田市は図書館運営を引き継ぎ、本間光丘と光丘文庫の名前を将来にわたって残すために「酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館」と改称しました。

昭和 57（1982）年 4 月、酒田市総合文化センターが竣工したことにより、同センター内に「酒田市立中央図書館」が設置されました。それまでの「光丘図書館」は「酒田市立^{こうきゅう}光丘文庫」と改称し、一般の図書を中心に所蔵する中央図書館と、古典籍や郷土資料を中心に所蔵する光丘文庫とに分かれて運営されることになりました。

光丘文庫はその後、建物の老朽化が進んだため平成 28（2016）年から翌年にかけてすべての所蔵資料と文庫機能を市役所中町庁舎の 5、6 階に移転して運営を続けました。

「酒田市文化資料館光丘文庫」の開館

令和 6（2024）年 5 月、光丘文庫が所蔵していた資料をすべて引き継ぎ、「酒田市文化資料館^{こうきゅう}光丘文庫」が開館しました。さらに酒田市立資料館、特定歴史公文書、埋蔵文化財整理の機能も合わさり、酒田にとって重要な、広範な分野の資料を保存する施設となりました。

「光丘文庫」の創設の理念や長年にわたる運営の努力に敬意を払い、酒田が誇るべき財産として、「光丘」の名称と貴重な資料を長く保存していきたいと考えています。

大正 12（1923）年
^{ひかりがおか}
財団法人光丘文庫 創立

大正 14（1925）年
^{ひかりがおか}
財団法人光丘文庫 開館

昭和 25（1950）年
光丘文庫内に
酒田市立図書館設置

昭和 33（1958）年
建物と蔵書を市へ寄附
酒田市立^{こうきゅう}光丘図書館

昭和 57（1982）年
^{こうきゅう}
酒田市立光丘文庫

平成 28（2016）年
市役所中町庁舎へ移転

令和 6（2024）年
酒田市文化資料館^{こうきゅう}光丘文庫
（総合文化センター内）

光丘文庫所蔵の文化財

光丘文庫は酒田の貴重な文化財を保管する役割も果たしてきました。現在は、旧酒田市立資料館が保管してきた民俗資料や工芸品も加わり、山形県指定文化財 2 件と酒田市指定文化財 40 件を所蔵しています。

当館が所蔵する代表的な文化財に、庄内藩士であり支藩松山藩の付家老となった松森胤保（文政 8/1825～明治 25/1892）の著書があります。山形県指定文化財『両羽博物図譜』59 冊は明治時代に胤保が著した、今で言うところの生き物図鑑です。胤保独特の考えに基づいて生き物を分類しており、文章も絵もすべて自筆です。同じく県指定文化財『松森文庫』41 部 128 冊は、松森家の系譜や、自身の体験に基づく戊辰戦争時の記録『北征記事』、考古学の『弄石余談』、写真技術をまとめた『陽光画譜』など広範な分野にわたる松森の著書です。

光丘文庫の所蔵資料

光丘文庫の蔵書には、江戸時代以来本間家が収集した和書や漢籍を始め、昭和 30 年ころまでの一般図書、点字図書、町政・村政資料などがあります。また、寄贈または寄託された古文書を「諸家文書」として保存している他、郷土の著名人の旧蔵書は特設文庫として、旧蔵者の名前をつけて保存しています。その他、明治 24 年～昭和 30 年ごろまでの新聞各種、写真、掛軸などがあります。

現在の酒田市文化資料館光丘文庫では、旧酒田市立資料館の所蔵資料、特定歴史公文書、埋蔵文化財整理室の資料も所蔵しており、非常に広範な酒田市の資料を所蔵する施設となっています。

国書（和書）

昭和 63（1988）年 3 月に発行された『酒田市光丘文庫所蔵国書分類目録』では、当時の蔵書の中から国書 5410 部を分類しています。主に江戸時代に日本で出版された、歴史、地理、文学など幅広い分野の書籍があります。



漢籍

所蔵している漢籍の多くは、本間家から寄贈されたものです。昭和 61（1986）年 3 月に刊行の分類目録では、漢籍と準漢籍の総計で 1,258 部と図 2 葉となっています。特に古い漢籍は明代の中国で刊行された「周禮注疏」が、準漢籍は寛永 15（1638）年刊行の「孔子家語」があります。



特設文庫 郷土出身者の旧蔵書

酒田出身の伊藤吉之助（ドイツ哲学者、1885～1961）旧蔵書 223 冊からなる伊藤吉之助文庫、同じく酒田出身の大川周明（思想家、明治 19/1886～昭和 32/1957）旧蔵書 2,687 冊からなる大川周明文庫、鶴岡出身の石原莞爾（軍人・思想家、明治 22/1889～昭和 24/1949）旧蔵書 2,403 冊からなる石原莞爾文庫があります。

佐藤良次収集 上田秋成関係資料

佐藤良次（明治 4/1871～昭和 5/1930）は、昭和初期にかけて活躍した酒田の文化人です。明治 35（1901）年に酒田新聞社に入社して主筆となったのち、明治 43（1910）年から町会議員として日和山公園の改造や酒田築港促進など数多くの事業にかかわりました。郷土史家でもあり、『飽海郡会史』を発刊するなど幅広い分野で活動しました。

良次の業績の中でも文学の分野で注目されることは、日本における怪奇文学の祖・上田秋成（享保 19/1734～文化 6/1809）を研究し、安永 5（1776）年出版の『雨月物語』を明治 26（1893）年に初めて活字本として発行したことです。

良次は上田秋成の関係資料の他、郷土史に関係する貴重な資料を所蔵していました。平成 3（1991）年、息子の佐藤三郎によりそれらのコレクションが光丘文庫に寄贈されました。良次の雅号にちなむ「北溟文庫」には、郷土資料の他『雨月物語』の安永 5 年初版本、『春雨物語』の草稿「春雨草子」、秋成が晩年愛用した茶碗や自作の皿 3 枚などがあります。

【主な参考文献】

『酒田市史改訂版・上巻』 酒田市 昭和 62（1987）年
『酒田市史改訂版・下巻』 酒田市 平成 7（1995）年
『酒田市史史料編第五集経済篇上（本間家文書）』 酒田市 昭和 46（1971）年
佐藤三郎『酒田の本間家』 中央書院 平成 3（1991）年
土岐田正勝『創設期の光丘文庫』 酒田市立光丘文庫 平成 11（1999）年